

私の心には、「人生の師」といえる師匠がずっと生き続けている。東京にある聖路加国際病院で一〇五歳までお元気に活躍された日野原重明先生である。残念ながら二年前にご逝去され、その際には様々な報道がなされて、ご記憶がある方も多いだろう。

米国の新聞ニューヨークタイムズ紙では、長生きのエキスパートとして紹介され、国内外の医学誌でも特集が組まれた。実は、先生が医療界で指導し人々に発信してきたことが、今も生き続けている。先生が広めた哲学は、日野原イズム(Hinoharism)と呼ばれ、全国の支部に浸透して未来に向けてさらに発展しつつある。

一、生活習慣病、循環器学

日野原先生は京都大学在学中に肺を電話をかけてご指導を仰いだことが懐かしく思い出される。

先生から教わったのが、医学と医療の比較について。両者にはサイエンスとアートという違いがある。病気の病人、治療 vs 癒し、命の長さ vs 命の質である。目標とする対象がサイエンスからみた疾病なのか、アートからみた病む人なのか。現実には両者とも必要で、両者が融合するバランスが大切となってくるだろう。

三、名医オスラーの研究

日野原先生はカナダの名医オスラー卿(William Osler)の研究者でもあった。オスラーはヒューマニズム溢れる医師、研究者、優れた教育者である。患者に寄り添う医療を実践し、医学生に心得と人生訓を説き続けた。つまりオスラー卿の哲学は、日野原先生にも受け継がれている。私事で恐縮だが、私は両先生から多くを学び、その一部をお伝えさせて頂いている。

悪い、寝たきりになってしまふ。しかし、強い生命力で蘇り、聖路加国際病院で勤務されていた。そんな最中、よど号のハイジャック事件で九死に一生を得たり、サリン事件では多数の患者を救命したり、通常ではありえない出来事に遭遇されたのである。

早期から先生が人々に伝えたのは、血圧測定など各自が健康の自己管理を行うこと。ニュースレター「教育医療」を発行して啓発活動を続けられた。その中で、生活習慣病という概念を一九七八年に提唱されたのである。

先生の医学研究においては、担当教授から「君は音楽が堪能で耳が良いので、心音の研究をしなさい」との助言が。英語論文を米国に送ったときは戦争の最中であった。返事がなく、氏が

四、「新老人の会」

日野原先生は二〇〇〇年に、ある組織を設立された。二十一世紀(二〇〇一―二二〇〇)において中高年者が有意義な人生を目指す「新老人の会」である。英語表記では、New Elderly Association, NEAとなる。NEAは一種の社会的ムーブメントであり、氏が九十八―一〇五歳にボランティアで全国や外国で講演を続けた期間を調べると、本邦の支部は三十一から四十七へ増加し、延べ参加者は約二十五万人だった。NEAの活動は国際的にも発信されている。

五、日野原イズムの展開

日野原先生はすでに天寿を全うされたが、全国各地では先生の哲学が引き継がれ展開している。四国では、日本統合医療学会四国支部が「新老人の会」四国連合と協調した活動が継続し展開している。

米国留学中に、自分の論文が米国の一流雑誌に掲載されたのを、同僚医師が教えたとの逸話もある。

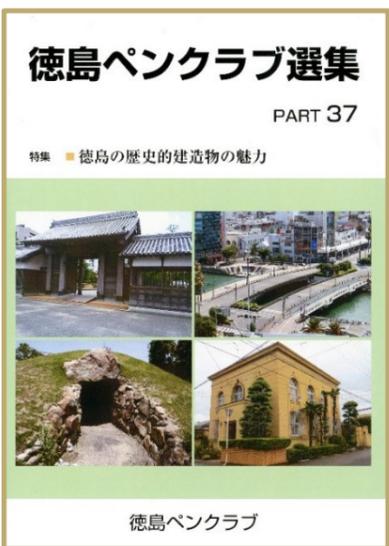
二、プライマリ・ケア医学

プライマリ・ケア医学(PC)は日本の医療を支えるシステムである。かつて、日野原先生がPCをわが国に導入した。つまりprimaryという意味は首相(prime minister)、またはプリマ・ドンナ(prima donna)のように、主な、主要という意味である。

PCは患者の診療に際して、基本となる概念だ。人の身体を臓器別でパーツが集まったものとするのではなく、心も身体もすべてを含み、全人的に診るといふ医療である。

かつて私が米国でPCの臨床研修を行っている際、よく日野原先生に国際齋藤史郎元徳島大学長である。その前に学長を担当された添田喬先生は、産官学で協調する「シニアパワー・ネットワークとくしま」を育てられた。阿波踊りの掛け声のように「踊らにゃ損々」と心身共に生き生きと人生を送りたいもの。私も未だにマスターズ陸上、野球、スケートと人生を生き生きと謳歌する事を信条としている。

日野原先生から皆様への助言は、「年齢を経ても常に新しく創めよう」[Keep on going (続けよう)]である。



徳島ペンクラブ選集
令和元年12月28日発行
Part 37: 64-65. 2019.